中古以降の四段動詞と上二段動詞

岡村弘樹

一、はじめに
二、活用型に揺れが見られる動詞
三、活用型に揺れが見られる動詞の形態上の傾向
四、中世に新たに成立した上二段動詞の形態
五、おわりに

本稿では、中古以降に四段活用と上二段活用との間で揺れが見られる動詞について検討した。先行研究では活用型に揺れが生じた積極的な理由がいくつか指摘されているが、そうした理由が考えられるにしては、活用型が転じた動詞というのは少ない。そこで、活用型に揺れが見られる動詞に四段活用には少ないタ行動詞が比較的多く見られることに着目し、四段活用らしさが希薄であるという条件が活用型の揺れに関わっている可能性を指摘した。

また、中世において四段活用ではなく上二段活用として新たに成立した動詞を調査したところ、バ行動詞・ダ行動詞・タ行動詞のみであった。バ行動詞は上代より上二段活用に特徴的に多く見られ、ダ行動詞は四段活用には一語も存在しない。タ行動詞はこれらに準ずる存在といえ、四段活用より上二段活用が優先されることがあったことを確認した。

一、はじめに

稿者は岡村（二〇一九）において、上代における自他対応と動詞の活用型との関係について検討した。本稿の前提となる議論であるため、以下その概略を記す。

上二段活用に属する動詞の多くは自動詞であり、非活動的・自然生起的な意味を有するものが多いといわれる（川端善明 一九七九、阿部健二 一九八三、木田章義 一九八八等参照）。一方、上代に見られる自他対応に関わる動詞といえば、例えば次のように、その活用型はほとんどが四段活用か下二段活用である（いずれも上が自動詞、下が他動詞）。

タツ〔立、四段〕　―タツ〔下二段〕
キル〔切、下二段〕―キル〔四段〕
ナル〔成、四段〕　―ナス〔四段〕
タユ〔絶、下二段〕―タツ〔四段〕
アル〔荒、下二段〕―アラス〔四段〕
マガル〔曲、四段〕―マグ〔下二段〕

中には、オク〔起、上二段自動詞〕―オコス〔四段他動詞〕、ツク〔尽、上二段自動詞〕―ツクス〔四段他動詞〕のように上二段動詞が関わる自他対応もあるが、それは釘貫亨（一九九六）で第Ⅲ群と呼ばれる自他対応、すなわち、元となる動詞の語尾にルないしスを付加することで新たな自動詞／他動詞を造り出す形式にしか見られない。[1] しかも、上二段動詞はその第Ⅲ群形式の派生元として、僅か六語（フ〔乾〕、オク〔起〕、オフ〔生〕、スグ〔過〕、ツク〔尽〕、ホロブ〔滅〕）見られるのみである。

所属動詞のほとんどが自動詞であるという特徴が上二段活用にあるにもかかわらず、何故かその特徴は活かされず、上二段動詞は自他対応にほとんど関わることがなかった。その理由として岡村（二〇一九）では、四段動詞連用形と上二段動詞連用形の形態に着目した。動詞の活用形のうち、最も頻用されるのは連用形である。そして上代における四段動詞連用形と上二段動詞連用形の活用語尾では、上代特殊仮名遣いでいうところの甲類と乙類の違いがあるのみである。例えば四段動詞サク〔咲〕の連用形サキのキは甲類の仮名で書かれ、上二段動詞ツク〔尽〕の連用形ツキのキは乙類の仮名で書かれた。ただし、上代の和歌を見ると、上代特殊仮名遣いの甲乙の異なりを問わずに掛詞が成り立っている例が複数見られる（蜂矢真郷 二〇〇七参照）。こうした掛詞が成立したのは、甲類の音と乙類の音とが近いものであったためであると考えられる。そこで、最も頻用される連用形の活用語尾が四段動詞と上二段動詞とで類似した音であったために、自他の対応を示すには相応しく

なく、四段活用と上二段活用とで自他対応を担うことが適わなかったのだろうと考えた。

以上が岡村（二〇一九）の概略である。そして平安時代になると、イ段音に関わる上代特殊仮名遣いの書き分けは完全に失われ、四段動詞連用形と上二段動詞連用形の活用語尾はいずれの行においても同形となった。先に挙げた例でいうと、サキ〔咲〕のキとツキ〔尽〕のキとが同じ音になったということである。このように連用形の活用語尾が同形となった四段動詞と上二段動詞が中古以降いかなる関係にあったかを本稿では検討してみたい。

二、活用型に揺れが見られる動詞

中古以降の上二段動詞には、元は四段活用であった動詞が上二段化した例が複数見られる。例えばオブ〔帯〕やモミツ〔紅葉〕といった動詞がそれである。(1)と(3)はそれぞれの四段活用の例、(2)と(4)はそれぞれの上二段活用の例である。(1)の「帯び」はビが甲類の仮名である「婢」字で書かれているため、四段活用として用いられていることが分かる。

(1)針袋　帯び続けながら（應婢都々気奈我良）　里ごとに　照らさひあるけど　人も咎めず

（万葉集・一八・四一三〇）

(2)其（の）左ノ手ヲ帯ブレバ兵ヲ避ル。

（高山寺本三教指帰・一七オ）

(3)子持山　若かへるての　もみつまで（毛美都麻弖）

寝もと我は思ふ　汝はあどか思ふ

（万葉集・一四・三四九四）

(4)しぐれつつ　もみづるよりも　言の葉の　心の秋に

あふぞわびしき

（古今集・一五・八二〇）

それとは逆に、元は上二段活用であった動詞が四段化した例も見られる。例えばヨク〔避〕やナグ〔和〕といった動詞がそれである。(5)と(7)はそれぞれの上二段活用の例(5)は「避き」のキが乙類の仮名「奇」で書かれている)、(6)と(8)はそれぞれの四段活用の例である。

(5)神の崎　荒磯も見えず　波立ちぬ　いづくゆ行かむ

避き道はなしに（与奇道者無荷）

（万葉集・七・一二二六）

(6)「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引き避かでなむ」…

（源氏物語・葵）

(7)相見てば　しましく恋は　和ぎむかと（奈木六香登）　思へどいよよ　恋増さりけり

（万葉集・四・七五三）

(8)身のうみの　思ひなぐ間は　今宵かな　うらに立つ

浪　うち忘れつつ　（平中物語）

動詞の活用型が変わるとき、例えば四段他動詞キル〔切〕が下二段化すれば自動詞になり、四段自動詞ナラブ〔並〕が下二段化すれば他動詞になるというように、意味が変化することが多い（釘貫 一九九六で第Ⅰ群形式と呼ばれる自他対応[2]）。一方、右で見たオブやナグなどの動詞は、活用型を転じても意味上の変化は見られない。では何故これらの動詞は、四段活用から上二段活用へ、あるいは上二段活用から四段活用へと活用型を転じたのだろうか。先行研究における指摘を見てみよう。

四段活用と上二段活用とで揺れが見られるバ行動詞（タフトブ〔尊〕やマナブ〔学〕等）について山口佳紀（一九八二）は、ニクム〔憎〕やヲシム〔惜〕といったマ行四段動詞の存在に触れた上で、「形容詞語幹に接辞ムのついたこれらと、タフトブ（尊）・ウレシブ（嬉）・カナシブ（悲）などとを比較すると、接辞ム（四段）と接辞ブ（上二段）との機能の近さが分る。上代以来、マ行音とバ行音とが交替する例は少なくないから、甲乙の別が失われると、上二段連用形～ビと四段連用形～ミとは、ますます近いものに感ぜられることになったであろう。そこに、バ行上二段が四段活用を始める契機があったと考えられる」と指摘する。そしてモミツやナグといったバ行以外の動詞については「個別の事情があり、一括して論じにくい」とする。後にまた確認するが、確かに四段活用と上二段活用とで揺れが見られる動詞の中にはバ行動詞が多い。活用型の揺れに語尾がブであることが関わっている可能性は十分に考えられるだろう。

川端（一九八二）は「四段から上二段への弱活用化には、恐らくその連用形音形態の保存か、その終止形音形態の靡による被覆（靡の膠着）かが、現実的な出発点になるであろう。「紅葉つ」や「帯ぶ」にとっては多分、連用形の保存が弱活用化の出発であったと思われる」（傍点は原文）とする。しかし、「恐らくかかる上二段化が、六活用形のすべてを同等に満たすものとして成立したと考える必要はないであろう」と述べ、これらの動詞は限られた活用形において活用型が変わったように見えるのであって、動詞として完全に活用型を変えてしまったわけではないという可能性を指摘している。これは上二段活用の四段化についても同様であり、「強活用化の徴候は現実として、未然形乃至連体形の形成にまず見られるであろう。恐らく、否定とか希望とかの特定述語形の或る現実を通じて、四段未然形の形態の分析が辿られるとか、連体装定の現に装定している或る現象の中に、靡の脱落が発見されて、四段連体形形態の分析が辿られるとかの、いわば状況の具体があるであ

ろう」（傍点は原文）という。これらの主張のうち、四段活用の上二段化においてその契機が「連用形音形態の保存」にあっただろうという点は、モミヂやオビといった名詞の具体例が挙げられていて諒解しやすい。[3]

阿部（一九八三）は、そのほとんどが自動詞であるといわれる上二段動詞の意味に着目し、四段動詞の上二段化と上二段動詞の四段化の統一的な説明を試みる。それはすなわち、「古代語上二段型活用は、本来、静的な意味でまとめられようとする傾向があり、全体にそういう方向で語の出入りがあった」というのである。そして、「上二段から転出したものはアクティブな作用、乃至は心理語であり、転入したものは、意味的に静的なものである。心理語が転出したのは、心理に対する把握の仕方に変化がおこったためであろう」と考察している。

以上確認してきた先行研究のいずれの指摘も妥当性を有するように思われる。いずれかの指摘が正しくていずれかの指摘が誤りというものではなく、これらの指摘のうち複数、あるいは全ての事情が関係したということも考えられよう。

しかし一方で、これらの指摘だけでは解消されない問題点もある。それは、四段活用と上二段活用との間で揺れが見られる動詞が何故それほど多くないのかというものである。実際にどれほどの動詞に活用型の揺れが見られたのかは後に詳しく見るが、例えば四段動詞の上二段化に「連用形音形態の保存」といったメリットや「静的な意味でまとめられようとする傾向」が強くあるならば、四段動詞の上二段化がもっと活発に起こっていてもおかしくない。

「連用形音形態の保存」に関連する例であれば、例えばマフ〔舞〕やヒカル〔光〕といった動詞は、以下のようにその連用形が名詞として古くから用いられている。

(9) 呉床居（あぐらゐ）の　神の御手もち　弾く琴に　舞ひする女
（麻比須流袁美那）　常世にもかも（記歌謡・九六）

(10) 赤玉の　光はありと（比訶利播阿利登）　人は言へど　君が装し　貴くありけり　（紀歌謡・六）

また、「静的な意味」に関連する例であれば、例えばチル〔散〕やカワク〔乾〕といった動詞は、オツ〔落〕やフ〔干〕といった上二段動詞があるように、意味上は上二段活用であっても良さそうなものである。しかしこれらの動詞はいずれも四段活用に留まり、上二段化した例は確認されない。これは単に、四段活用には所属語数が極めて多く上二段活用の所属語数は少ないといった量的な要因で上二段化が活発には起こらなかったという可能性も考えられるが、その他の可能性がないかを検討する必要はあるだろう。

三、活用型に揺れが見られる動詞の形態上の傾向

中古以降に四段活用と上二段活用との間に見られる活用型の揺れの原因について、先行研究の指摘を確認した。しかし、先行研究の指摘した原因がそのまま正しいならば、活用型の揺れはより多くの動詞に見られそうに思う。そこで本節では、四段活用と上二段活用との間での揺れが見られる動詞を確認することで、揺れが生じた動詞に何かこれまでに指摘されていない傾向がないかを検討したい。

まず、『日本国語大辞典 第二版』（以下『日国』と呼ぶ）の記述を参考にして、四段活用と上二段活用との間で活用型が揺れたり転じたりした動詞をまとめてみた。それが表1である。

表1

動詞	上二初出	四段初出
アハレブ〔憐〕	大鏡12	西大寺本不空羂索神呪心経11
イク〔生〕	今昔物語集12	万葉集８
イサブ〔叱〕	松田氏蔵四分律行事鈔９	石山寺本法華義疏11
イナブ〔辞〕	宇津保物語10	撰集抄13
ウラム〔恨〕	石山寺本大智度論９	延慶本平家物語14
オソル〔恐〕	東大寺蔵地蔵十輪経９	西大寺本不空羂索神呪心経11
オブ〔帯〕	高山寺本三教指帰11	日本書紀８
カナシブ〔悲〕	万葉集８	古今集10
カル〔借〕	運歩色葉集16	万葉集８
シフ〔癈〕	聖語蔵本成実論９	万葉集８
シノブ〔忍〕	万葉集８	平中物語10
シノブ〔偲〕	源氏物語11	古事記８
シム〔染〕	蜻蛉日記10	万葉集８
スサブ〔荒〕	万葉集８	石山寺本成唯識論11
ソホツ〔濡〕	蜻蛉日記10	源氏物語11
タフトブ〔尊〕	続日本紀８	大東急本大日経義釈11
タフトム〔尊〕	観智院本三宝絵10	万葉集８
ナグ〔和〕	万葉集８	平中物語10
ネグ〔労〕	古事記８	曽丹集11
ヒツ〔漬〕	蜻蛉日記10	万葉集８
ホコロブ〔綻〕	源氏物語11	順集10
ホロブ〔滅〕	東大寺本大般若涅槃経11	石山寺本大唐西域記12
マナブ〔学〕	西大寺本金光明最勝王経９	高野山大学図書館蔵蘇悉地羯羅経11
マネブ〔学〕	梁塵秘抄12	東大寺諷誦文稿９
ミツ〔満〕	徒然草14	万葉集８
ムツブ〔睦〕	源氏物語11	日蓮遺文13
モミツ〔紅葉〕	古今集10	万葉集８
モル〔漏〕	天理図書館本南海寄帰内法伝11	源氏物語11
ヨク〔避〕	万葉集８	歌仙本貫之集10
ヨロコブ〔喜〕	続日本紀８	興聖寺本大唐西域記10

ここに掲げる動詞は『日国』に掲載されている初出の用例が上二段活用・四段活用ともに中世以前であるものに限り、イヒスサブ〔言荒〕やマチヨロコブ〔待喜〕のような複数の動詞が連続したものは除いた。

なお、一口に上二段動詞の四段化、四段動詞の上二段化といっても、ミツ〔満〕のように近世や近現代に至るまで長期にわたって活用型が安定しない動詞もあれば、モミツ〔紅葉〕のように一方の活用型の用例がすぐに見られなくなる動詞もある。また、初出例が見られる時代が上二段動詞と四段動詞とであまり違いがないために、いずれの活用型が元の活用型であったのかが判断しがたい動詞もある。中古以降は上代特殊仮名遣いによる連用形活用語尾の形態上の差異がなくなるため、連用形の用例ばかり見られていずれの活用型としての用例であるかが判断できないことも多い。

四段活用と上二段活用との間で揺れが見られる動詞を表にまとめる際にはこうした複数の懸念点があるが、必要があれば適宜詳しく見てゆくこととして、ひとまず表1では煩雑になるのを避け、動詞をシンプルに五十音順で並べた。また、参考情報として、『日国』で示されている初出の資料名とその資料が成立した世紀を併せて示した。ただし、『日国』に初出として挙がっている用例がいずれの活用型か不明なものである場合には、自身で調べて補ったところがある。[4]

さて、表1に掲げた動詞は全部で三十ある。この中にはイク〔生〕のように個別の事情によって活用が転じた動詞も含まれるが（櫻井光昭 一九七七参照）、その他に全体を通しての傾向がないかを探ってゆきたい。

山口（一九八二）で取り立てて検討されていたようにバ行動詞が多いが、一方で、四段活用全体の中で最も多いラ行動詞が表1には多くないことも注目される。そこで、表1の動詞がいずれの行で活用したものかを数値で示すと、表2のようになる（サ行動詞は上二段活用になく、ザ行、ダ行、ヤ行、ワ行の動詞は四段活用になく、ア行、ナ行の動詞はいずれにもないため、省略する）。

表2

カ行	ガ行	タ行	ハ行	バ行	マ行	ラ行
2	2	4	1	15	3	3

ラ行動詞は三例で、バ行を除く他の行の例と比べて少ないということはない。しかし、四段活用におけるラ行動詞の多さを考慮するならば、やはり少ないといえよう。ラ行動詞の三例のうちカル〔借〕は、表1の中でも活用型の揺

れが見られるようになるのが最も遅い動詞である。これはアク〔飽〕―アキルやタル〔足〕―タリルとともに、近世以降の東西の方言の対立の一例として扱われるべき動詞である。そのため、中世までの動詞を集めた表1の中では異質なものとなっており、例外として扱うべきであろう。

また、後に下二段化するモル〔漏〕は上二段活用の古い例がごく僅かしか見られず、辞書により扱いが異なっている。『日国』は四段動詞モルとは別に上二段動詞モリルを立項し、左の『古今和歌六帖』の例と『好色万金丹』の例を挙げる（『好色万金丹』は時代が下るため、ここでは挙例を省く）。

⑾なつごろも　うすき心と　きくからに　ことのはさへや　もりむとぞおもふ

（古今六帖巻五・服飾・三二九二）

『岩波古語辞典　補訂版』は恐らく⑾の用例を承けて、下二段化する前の動詞モルを専ら上二段動詞として扱い、四段動詞としてのモルには言及していない。[5] しかし山口（一九八二）は、続国歌大観本では同じ箇所が「漏れむ」となっているため、⑾を上二段活用の例として「必ずしも確実でない」と指摘する。そして『角川古語大辞典』は、下二段化する前の動詞モルを専ら四段動詞として扱う。

一方、『訓点語彙集成』でも上二段活用としてのモルが立項されている。全部で五例挙がっているが、そのうち四例は、東大寺図書館の『大般涅槃経』で「淋漏」とある本文に仮名でモリモル、と付された例を二例挙げている。二例それぞれのモリとモル、を全て上二段活用と捉えているので、これで四例となる。モリが四段活用、モルルが下二段活用といった複雑な例でない限り、上二段活用の例だといえそうである。[6] 残る一例は天理図書館蔵『南海寄帰内法伝』巻一で「不洩」を「洩（モ）リ不るは」と訓んだ例である。これは古代における上二段活用モルの確かな例といえよう。

以上のように、上二段動詞としての確かな例がごく僅かしか見られないため、モルは四段活用と上二段活用との間で揺れがあった動詞としてやや扱いにくいところがある。

残るラ行動詞は、後に下二段活用に転ずるオソル〔恐〕である。オソルは表1には上二段動詞としての初出が九世紀、四段動詞としての初出が十一世紀とあるが、動詞オソルと見られる用例自体はより古くから見られる。

⑿…恐み受け賜り懼（おそ）り（懼理）坐す事を衆（もろもろ）聞き食（たま）へよと宣りたまふ。

（続日本紀・五詔）

しかし連用形の例ばかりで、いずれの活用型としての用例であるかが判断できない。元が上二段活用であったのか、あるいは四段活用であったのかも判然としない。

四段動詞の上二段化が「連用形音形態の保存」をするた

めや「静的な意味でまとめられようとする傾向」によって生じたのであれば、四段活用の中で最も語数が多いラ行動詞が関わる活用型の揺れの例が多く見られそうなものである。しかし実際には、以上確認してきたように、ラ行動詞で四段活用と上二段活用との間で揺れが見られた動詞は非常に少ない。上二段活用・四段活用間の揺れには、他の要因も関わっている可能性が考えられよう。

そこで改めて表2を見てみると、バ行動詞に次いでタ行動詞の例が他の行より僅かに多いことに気が付く。タ行動詞で四段活用と上二段活用との間で揺れが見られるのは、ソホツ〔濡〕、ヒツ〔漬〕、ミツ〔満〕、モミツ〔紅葉〕の四語である。

このうち、ソホツには注意を要する。初出例は『日本書紀』に見られる。

⒀…玉笥には　飯さへ盛り　玉盌に　水さへ盛り　泣きそほち行くも（儺岐曽裒遅喩倶謀）　影媛あはれ

（紀歌謡・九四）

しかしソホツの活用型が分かる用例は少なく、特に四段活用としての用例は次の一例のみである。

⒁浅みにや　人は下り立つ　わが方は　身もそぼつまで　深きこひぢを

（源氏物語・葵）

これを承けて宮地幸一（一九七四）は、中古にソホツの四段活用を認めることを疑問視している。一方で、動詞の意味から、蜂矢（一九九〇）はソホツが上代においては四段活用であった可能性を指摘する。語尾の清濁についても諸説あり、問題の多い動詞である。

他の三語は、いずれも四段活用から上二段活用に転じたものである。[7] ところで、四段活用においてラ行動詞が多いことは既に述べたが、実はタ行動詞は四段活用のうち清音の語尾を持つ動詞の中でも最も少ない。[8]

例えば『時代別国語大辞典　上代編』所収の四段動詞を見てみると、清音の語尾を持つ動詞のうちタ行以外の行で活用する動詞はいずれも一〇〇語以上立項されているのに対し、タ行動詞は五五語しか立項されていない。また、奈良時代から鎌倉時代までの十七作品[9]の索引を総合した『日本古典対照分類語彙表』によると、四段動詞の各行の異なり語数は表3の通りである（先述の通り、四段活用にア行・ナ行・ヤ行・ワ行の動詞はないため、省略する）。

表3

カ行	1098
サ行	1452
タ行	304
ハ行	1016
マ行	400
ラ行	1849

これを見ると、四段活用の中でもタ行動詞とマ行動詞が比較的少ないことが分かる。さらにタ行動詞の三〇四語には、イデタツ〔出立〕やオモヒタツ〔思立〕のようなタツ〔立〕を後項とする複合動詞[10]の例がおよそ一〇〇語含まれており、複合動詞の例を除外するとタ行動詞の語数はさらに大幅に減少する。

活用型に揺れが見られる動詞の中で、四段活用に多いラ行動詞の例が少ないことは先に確認したが、むしろ四段活用に少ないタ行動詞の例が多いということが指摘できそうである。阿部（一九八三）はこの活用型の揺れについて、上二段動詞の意味の偏りに着目して「静的な意味でまとめられようとする傾向」があるだろうと指摘したが、それと併せて、形態上四段活用らしさの薄い動詞がこの活用型の揺れに関わりやすいという傾向があったのではないだろうか。

四、中世に新たに成立した上二段動詞の形態

中古以降四段活用と上二段活用との間で揺れが見られる動詞について、従来の指摘に加え、四段活用の形態が関係する可能性を指摘した。四段活用にはラ行動詞が多いため、ラ行と四段活用の結び付きは強いものであっただろう。一方、四段活用にはタ行動詞が比較的少ない。そのため、活用型に揺れが見られる動詞において、ラ行動詞が少なくタ行動詞が多かったのではないかと考えられるのである。

しかし、用例の多寡を問うには、ラ行四段動詞全体とタ行四段動詞全体との間に大きな語数の差があるという背景を考慮しても、表2における数値の差異のみでは僅かな違いに感じられるかもしれない。そこで本節では、中世に新たに成立した上二段動詞を参考として見てゆきたい。

動詞において、四段動詞が最も多く下二段動詞が次いで多いが、さらにその次に多い上二段動詞は、四段動詞・下二段動詞と比べると語数が非常に少ない。そのため、新しく動詞が造られる際にはそのほとんどが四段活用か下二段活用になることは想像に難くない。

実際、鎌倉時代以降新しく造られた上二段動詞は極めて少ない。『日国』を参考にして、鎌倉時代から室町時代において初出が見られる上二段動詞を全て挙げると、次のようになる。なお、モチユ〔用、元は上一段モチヰル〕、シユ〔強、元はシフ〕のように既存の動詞の形態が変化して成立したことが明らかなものや、アツツ、ドム〔曇〕のように上二段活用か四段活用かが不明なものは省いた。

⑮鎌倉時代から室町時代において新たに成立した上二段動詞

アキサブ〔秋〕、イコヅ、オイサブ〔老〕、カラサブ、

カラブ〔唐〕、コヅ〔抉〕、コブ〔古〕、シナブ〔萎〕、シビツ〔痱〕、シヤツ、ゾクブ〔俗〕、ツユサブ〔露〕、ナツサブ〔夏〕、ムカシブ〔昔〕、ワカキブ〔若〕、ワザトブ〔態〕

上二段活用にはバ行動詞が多く見られるが、それは、造語力の強い接尾辞ブが存在するためである。この接尾辞ブと、同様の意味を有する接尾辞サブとはともに上代から見られるが、中世においても引き続き造語力を保っており、柔軟に新しい動詞を生み出していたことが⑮から窺われる。⑮で傍線を付していない動詞は全て接尾辞ブかサブが付いた動詞である。そして、⑮で接尾辞ブ、サブと無関係である動詞は、イコヅ、コヅ〔抉〕、シビツ〔痱〕、シヤツの四語に限られる。

まずイコヅとコヅ〔抉〕についてであるが、上二段活用にはダ行動詞が若干見られるのに対し、四段活用にはダ行動詞が一語もない。また、これらの動詞は意味の上でネヅ〔捩〕などのダ行上二段動詞と通ずるところがある（イコヅについては蜂矢 一九九〇参照）。形態的にも意味的にも、これらの動詞が上二段活用として成立したのは当然と言えよう。

シヤツは次の一例しか見出せない。

⑯有材力ウデガシヤチタゾ。

（史記抄・一四・六〇丁ウ）

大塚光信（二〇〇八）によると、このシヤツは意味上「コワイ、コワル（強・剛）の系統の語」（六頁）と思われ、硬直した様子を表すシヤチコハルやシヤチバルと関連すると考えられる動詞である。⑯の用例は連用形のため、これだけでは上二段活用か四段活用かが判然としない。ただ、『史記抄』においてタ行四段動詞の連用形にタが下接した例は十八例見出せるが、その全てが「我ヲアザムクカト思テハラタツタゾ」（一〇・四九丁ウ）「同ジヤウニソダツタ」（一三・五九丁オ）のように促音便化している。タ行動詞の連用形にタが下接しているにもかかわらず促音便化していない⑯は、上二段動詞と考えて差し支えないだろう。シヤツは右で述べたように自然生起的な意味を有すると考えられ、本稿冒頭で確認した上二段活用の意味的傾向とも合致する。

残るシビツ〔痱〕も、次の一例しか見出せない。

⑰男根ガハレテ小便ヲスレバ袴ニカ、ルゾ。（中略）サルホドニ小袴ヲコシラエテ其ニシビツルゾ。

（史記抄・一二一・四七丁ウ）

このシビツは「少しずつ小便をもらす」（『日国』）ことを意味すると考えられる。『時代別国語大辞典 室町時代編』はこの用例をシビ＋ツルと捉え、上一段動詞シビルとして

立項している。このシビルという動詞は『名語記』に「ユハリヲシヒル如何」（巻八・一二五丁オ）という形で既に見えるが、中世には他にシビリイバリ〔痱尿〕、シビリバリという名詞も見える。シビルが上一段動詞であるならば連用形はシビとなるはずであり、シビリイバリのような名詞は造られそうにない。『日国』や『角川古語大辞典』がそう捉えているように、上一段動詞シビルが存在したと考えるのではなく、四段動詞シビルが鎌倉時代から存在したと捉えるべきであろう。そしてこの四段動詞シビルと⑰の「シビツル」とは、形態上類似していることや⑰の文脈から、類義語であると考えられる。また、⑰の「シビツル」が上二段動詞シブ＋助動詞ツである可能性もある。しかし、ゾに続く形で過去や完了が表現される場合には～タゾという形が『史記抄』では頻用されている。そのため、ここでは⑰の「シビツル」を、動詞シブ＋助動詞ツではなく単独の動詞シビツ（あるいはシビツル）の例と捉えることとする[11]。

ただし、この「シビツル」の活用も判然としない。四段動詞に既にシビルという動詞があったことを考えると、その語中にツを挿入した四段動詞シビツルを新たに造るというのは考えにくいように思う。しかしそうだとしても、上二段活用なのか下二段活用なのかが不明である。ただ、四段動詞シビルが先に存在していたのであれば、そこから新たに下二段動詞シビツを派生するとなると、活用型を転じたことによってシビルと自他で対応するような意味に変わりそうなものである。あるいは、ツという語尾から、下二段自動詞ウク〔穿〕に対する四段他動詞ウガツ、四段自動詞アヤマル〔誤〕に対する四段他動詞アヤマツといった自他対応の例も想起される。しかし、シビルと「シビツル」とがこのように自他対応の関係にあるのではなく、同様の意味を表すらしいことを考慮すると、「シビツル」が下二段活用ではなく上二段動詞シビツの連体形である蓋然性の方が高いように思われる。なお、シビツの意味も、くしゃみすることを表す上二段動詞フ〔嚏〕の存在を考え合わせれば、同じく生理的な意味であるため、先に見たシヤツと同じく上二段活用として矛盾するものではない。

以上、鎌倉時代から室町時代において新たに成立した上二段動詞について見てきた。これらの動詞に関して何より特徴的なのが、活用する行がバ行・ダ行・タ行にのみ集中している点である。ブやサブは上二段活用の所属動詞の中で大きな割合を占める接尾辞であり、ダ行動詞は上二段活用には見られるが四段活用には見られない。タ行動詞はこれらに準ずる存在であると捉えることができよう。つまり、四段活用にもタ行動詞はあるものの、他の行と比べると少

ないため、四段活用らしさが薄かったのである。そのためにシヤツやシビツといった動詞が四段活用ではなく上二段活用において成立することが許されたのだろうし、前節で指摘したように、四段活用と上二段活用との間で揺れる動詞にタ行動詞が比較的多かったのだろう。

なお、鎌倉時代から室町時代にかけて、四段活用においてタ行動詞が全く新しく造られなかったというわけではない。以下のタ行四段動詞の初出が鎌倉時代から室町時代にかけて見られる。

⑱鎌倉時代から室町時代において新たに成立したタ行四段動詞

アフツ〔煽〕、イラツ〔苛〕、コツ、コボツ〔零〕

『日国』によると、アフツはアフル〔煽〕と同様に「あおいで風を起こす」等の意味をもち、コツは「打つ」ことを意味し、コボツはコボス〔零〕と同じ意味であるという。いずれも他動詞であり、上二段活用にはそぐわない意味を持つ。イラツのみはイラダツ〔苛立〕と同様の意味を持つ自動詞であり、意味的には上二段活用として成立しても良さそうであるが、四段動詞イラツが成立する前に他動詞の下二段動詞イラツが存在していたらしい（「…乗物よりおり候へおり候へ」といらてけれども…」平家物語・巻一）。第Ⅰ群の自他対応形式に倣って、下二段活用の他動詞に対応する四段活用の自動詞として成立したのだろう。

こうして見ると、単純にタ行動詞であれば上二段活用として成立したというのではなく、阿部（一九八三）が指摘するように、意味も重要であったらしいことが窺われる。中世に新たに上二段活用として成立した動詞はいずれも、形態上は四段活用にそぐわないか、あるいは四段活用らしさが希薄であり、かつ意味の上では上二段活用らしさをもつものであった。そしてこれは、前節で見た四段活用と上二段活用との間で揺れが見られる動詞についても同様である。形態と意味という二重の条件があったため、活用型に揺れが見られる動詞がそこまで多くなかったのだろうと考えられる。

五、おわりに

本稿では中古以降の四段動詞と上二段動詞について、特に活用型の揺れが見られる動詞に着目して検討を進めてきた。最後に、本稿の結論と関連する見通し等について二点述べておきたい。[12]

まず、本稿ではタ行動詞について四段活用らしさが希薄であると述べたが、タツ〔立〕やマツ〔待〕といった頻用される四段動詞もあることから、そのようなことが言えるのかという疑問を持たれるかもしれない。『日本古典対照

分類語彙表』によると、十七作品においてタツは一〇一三例、マツは六五五例見られるとあり、確かにタ行動詞の中にも頻用される動詞があることが分かる。しかし本稿で見てきたように、活用型の揺れが見られるのがタ行動詞に多かったり、中世において新たに動詞を造る際に四段活用ではなく上二段活用が選択された例がタ行動詞に複数見られたりすることから、実際の使用頻度と四段活用らしさとは別問題として捉えるべきだと考える。使用頻度が高い動詞が含まれるにもかかわらず、上代から時代が下っても変わらずに四段活用の中でタ行動詞の語数が少ないままであるというのも、このことと関連していよう。

次に、上代では四段動詞の連用形と上二段動詞の連用形の活用語尾が似た形態であることから、文献でたどり得るよりも前の時代においては、四段活用から上二段活用へ、あるいは上二段活用から四段活用へと活用型を転ずることが多くあったのではないかと想定されることがある。そのように想定するとき、上二段活用の所属語数が上代において既に少ないのは、一部が上二段活用から四段活用に転じたためだと考えることも可能である。しかし本稿で見てきたように、連用形の活用語尾が両活用で同形になった中古以降では、活用型の揺れが見られる動詞はあまり多くなかった。これは、活用型を転ずる動詞は基本的に、形態と意味という二重の条件を満たす必要があったためであると考えられる。連用形の形態に違いがない中古以降でさえこうした状況であるので、いくつかの行の連用形が上代特殊仮名遣いによって書き分けられていた上代やそれ以前の時代においては、中古以降と同様に、あるいはそれ以上に、四段活用と上二段活用との間で揺れが見られた動詞というのは少なかったのではないかと考える。ただし、一方の活用型が既に存在し、もう一方の活用型が遅れて成立したばかりの時代（四段活用を古いと見るか上二段活用を古いと見るかは立場によって異なるが[13]）を想定するとき、中古以降ともまた状況が大きく異なるので、この限りではない。更なる検討を要する。

〈注〉

（1）釘貫（一九九六）では上二段動詞が関わる自他対応として他に、第Ⅰ群の中でナグ〔和、上二段自動詞〕―ナグ〔四段他動詞〕という例を挙げている。しかし岡村（二〇一九）では、この自他対応の組が複数の観点から見て極めて例外的であることから、上二段ナグと四段ナグを自他対応の組とは捉えなかった。本稿の見解も同様である。

（2）上代の第Ⅰ群形式の自他対応について、釘貫（一九九六）は「四段と下二段が全体として自他いずれの情報も積極的に表示していない」のであり、「対応する両形のうちいずれが

自動詞でいずれが他動詞であるかは、それぞれの語で個別に決まっている」（二五二～二五三頁）とする。それに対して屋名池誠（二〇〇〇）や岡村（二〇一九）は、上代における第Ⅰ群形式のいずれも四段動詞が派生元であり、下二段化することでその意味に対応する自動詞／他動詞を造り出したと考える。

（3）四段活用シム〔染〕の上二段化についても同様のことが指摘できるかもしれない。名詞シミの初出例は、例えば『日国』では『申楽談儀』に見られるとなっていて、中古よりも大きく下る。しかし中古には、「しみ深し」という形容詞の例が見られる。

・…唐の縹の紙の、いとなつかしうしみ深う匂へるを、…
（源氏物語・胡蝶）

「―深し」という語構成の形容詞を見てみると、中世以降に成立したものの中には「疑い深し」「恨み深し」「ざれ深し（じゃれ深し）」「たしなみ深し」「慎み深し」「恵み深し」のように動詞の連用形＋フカシという語構成のものが少なくない。一方、中古までに成立したものを見ると、「奥深し」「草深し」「毛深し」「心深し」「木深し」「慈悲深し」「罪深し」「情け深し」「根深し」「物深し」「夜深し」のように、名詞やそれに類するものにフカシが付いた例しか見られない。動詞連用形＋フカシとも見られる「至り深し」という語があるが、「至り深し」は「注意や心づかいが、物事に行きわたっている。」「学問などに深く通じている。造詣が深い。また、風景などに奥深さが感じられる。趣が深い。」（以上『日国』）という意味の形容詞であり、動詞イタルの連用形にそのままフカシが付いたものというよりは、名詞として熟したイタリにフカシが付いたものと考えられよう。以上より、「しみ深し」のシミも中古において既に名詞であったと考えられる。ただし上二段動詞シム〔染〕については、中古においてその存在を疑う異論もある（山口一九八二参照）。

（4）例えばマナブ〔学〕の場合、『日国』の補注には「【一】〈稿者注：四段活用の例〉には、【一】か【二】〈稿者注：上二段活用の例〉か判別できない連用形の例も含まれている」とある。実際に四段活用の例として挙げられているものを見ると、最も古い例は十世紀成立の『枕草子』におけるものであるが、「雨の声をまなぶらんもあはれなり」と終止形接続のラムが下接した例であり、上二段活用の例である可能性もある。そして『日国』の挙例で、明らかに四段活用の例であるものとして最古の例は十四世紀成立の『徒然草』の「驥をまなぶは驥のたぐひ」という例である。しかし『訓点語彙集成』によると、十一世紀加点の高野山大学図書館蔵『蘇悉地羯羅経』に、「敷」字に対して角点で「マナムテ」と付した例が見られるという。そのため表1では、マナブの四段動詞としての初出資料は「高野山大学図書館蔵蘇悉地羯羅経」としてある。

（5）ただし以下のように、四段動詞モル〔漏〕の確例は複数見られる。

・雨降れど　露ももらじを　笠取の　山はいかでか　もみぢ染めけむ
（古今集・五・二六一）

・君を思ふ　ひまなき宿と　思へども　今宵の雨は　もらぬ間ぞなき
（大和物語・六七段）

何故『岩波古語辞典 補訂版』において四段動詞モルに言及されていないのか、不審である。

（6）モルの活用型を巡っては、室町時代後期の抄物『玉塵抄』巻一に次のような興味深い例が見られる（引用は叡山文庫本（五一丁ウラ二－七行）によるが、当該箇所は国会図書館本との間に異同はない。東京大学国語研究室本は未確認。句切点を文脈に沿って句読点に置き換え、適宜濁点を補った）。

・上ニヲイテ、漏ノソコニ、ホソイ穴ヲ、アケテ、上カラ、水ノシヅクガ、モリテ、水ガ皆ニナレバ、漏ガ水ニ、シヅムゾ。一時ノアイダニ、水ガ、イカホドモルヽト、云コトヲシルゾ。（中略）転レ銅ヲハ、漏ノ水ガ、モルニ、シタガウテ、時刻ガ、ウツリ転ジテ、イタゾ。

右の例では、動詞モルの連用形モリ、終止形モルル、連体形モルが確認される。はじめの二例を見ればこれを上二段活用の例と判断することができそうであるが、連体形モルは四段活用としか考えられない。モルは下二段活用の例も中古から見られるので、連用形モリと連体形モルは四段活用、終止形モルルは下二段活用と考えられるだろうか。あるいは、抄物では片仮名のニが小さな点を縦に二つ並べただけのように書かれることがあるので、右の例で「モルニ」とあるのは、元は「モル、ニ」とあったのが、踊り字と片仮名ニの三つ並んだ点のうちの一つが脱落して「モルニ」と誤写されたという可能性も考えられるかもしれない。その場合、連用形モリ、終止形モルル、連体形モルルは全て上二段活用の例と見なされる。しかしいずれにせよ、これらのモルの例の活用型が何であるかを確定させることは難しい。

（7）ヒツ〔漬〕については山内洋一郎（一九六四）参照。ミツ〔満〕は現代でも、「定数に満たない」のように上一段動詞ではなく五段動詞として用いられることがある。

（8）動詞の語尾を見ると、濁音は少ない傾向にある。例えばザ行動詞というのは、生ズや御覧ズのようなサ変動詞を除けば、下二段活用のマズ〔混〕と上二段活用か四段活用かが不明なコズ〔掘〕くらいしかない。また、ダ行動詞は、下二段活用であればイヅ〔出〕やカナヅ〔奏〕、上二段活用であればオヅ〔怖〕やハヅ〔恥〕などがあるが、四段活用には一語もない。こうした背景を考慮し、ここでは清音の語尾に限った。なお、上二段活用ではバ行動詞が最も多いが、これは造語力の強い接尾辞ブがあるためであり、例外的である。

（9）『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』『古今和歌集』『土左日記』『後撰和歌集』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『新古今和歌集』『方丈記』『宇治拾遺物語』『平家物語』『徒然草』の十七作品である。

（10）特に古代語では、複数の動詞が連続した例を「複合動詞」と判断するには慎重な検討を要する（例えば青木博史 二〇一六、百留康晴 二〇二〇等参照）。ただし、『日本古典対照分類語彙表』では複数の動詞が連続した例が数多く立項されており、本稿執筆にあたって、それらが全て複合動詞と見なせるかといった検討はできていない。ここでは仮に『日本古典対照分類語彙表』における複数の動詞が連続した例を複合動詞と呼ぶこととし、厳密な意味での使用でないことを断っておく。

（11）『史記抄』の本文に誤りがあるという可能性も考えられるが、『史記桃源抄の研究』によると、この「其ニシビツルゾ」の箇所は諸本間で特に異同は見られない。

（12）四段活用と上二段活用とが一応関係する現象として、上二（一）段活用が五段活用に転じた方言が現代語では見られる

（小林隆 一九九五等参照）。ただし、本稿で見てきた活用型の揺れは複数の条件を満たした動詞にしか見られなかったが、この上二（一）段動詞の五段化にはそうした厳しい条件は見出せず、多くの動詞に見られる。また、本稿で見てきた上二段活用の四段化では、例えば上二段ヨク〔避〕→四段ヨクの場合、連用形ヨキと終止形ヨクはそのままでありながら、未然形ヨキがヨカに、連体形ヨクルがヨクに変化する。一方現代語の方言に見られる五段化は、例えば上二段オクル〔起〕→五段オキルの場合、否定形オキンがオキランに、意志形オキヨーがオキローに、命令形オキロがオキレにというように、そもそも本稿で見てきた変化とは変化後の形態が大きく異なる。このように、現代語の方言に見られるのは単に五段化というよりもラ行五段化と呼ぶべきものであり、同様の変化が上二（一）段活用だけでなく下二（一）段活用やサ行変格活用、カ行変格活用にも見られるという。変化の範囲や具体的な内容が異なることから、本稿で扱ってきた現象とラ行五段化とが直接的に関係することはないと考える。ラ行五段化が始まったのは、全ての二段活用と変格活用（ナ変を除く）の終止形末尾にルが付くようになった「終止形と連体形の合流」の完了より後のことであろう。

(13) 稿者は四段活用よりも二段活用（下二段・上二段）の方が古いのではないかと考えている。二段活用を古いと考える立場については、その想定する根拠や展開に違いはあるが、木田（一九八八）、早田輝洋（二〇一〇）、蜂矢（二〇一七）を参照のこと。

〈参考文献〉

青木博史（二〇一六）「複合動詞の歴史」『日本語歴史統語論序説』（ひつじ書房）第十三章

阿部健二（一九八三）「上二段活用所属動詞群の史的傾向――古代語上二段から近代語上一段への展開を通して――」『国語語彙史の研究 四』和泉書院、『国語文法史論考』（明治書院、一九七六）所収

大塚光信（二〇〇八）『ことばと資料私注』清文堂出版、初出は「雞肋三題」『梅花女子大学文学部紀要（国語・国文学）』二九号（一九九五）の一項

岡村弘樹（二〇一九）「上代における自他対応と上二段活用」『国語国文』八八巻八号

川端善明（一九七九）『活用の研究Ⅱ』大修館書店（一九九七年に清文堂より増補再版）

川端善明（一九八二）「動詞活用の史的展開」『講座日本語学2 文法史』明治書院、『活用語の研究Ⅱ 増補再版』（清文堂出版、一九九七）所収

木田章義（一九八八）「活用形式の成立と上代特殊仮名遣」『国語国文』五七巻一号

釘貫 亨（一九九六）『古代日本語の形態変化』和泉書院、初出は「上代語動詞における自他対応形式の史的展開」『国語論究2』（明治書院、一九九〇）

小林 隆（一九九五）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』四五号

櫻井光昭（一九七七）「生クの活用について」『国語学』一一〇集

蜂矢真郷（一九九〇）「ダ行上二段動詞語彙考」『ことばとことのは』七集

蜂矢真郷（二〇〇七）「上代特殊仮名遣に関わる語彙」『万葉』一九八号
蜂矢真郷（二〇一七）「動詞の活用の成立――木田章義氏「二段古形説」をめぐって――」『論集 古代語の研究』清文堂出版
早田輝洋（二〇一〇）「上代語の動詞活用について」『水門 言葉と歴史』二二号、『上代日本語の音韻』（岩波書店、二〇一七）所収
百留康晴（二〇二〇）「日本語複合動詞の発生史について」『国語学研究』五九号
宮地幸一（一九七四）「動詞「ひつ・そほつ」考」『国学院雑誌』七五巻一号
屋名池誠（二〇〇〇）「〈書評〉釘貫亨著『古代日本語の形態変化』」『国語学』五一巻一号
山内洋一郎（一九六四）「動詞「漬つ」について」『国語学』五九集、『野飼ひの駒―語史論集―』（和泉書院、一九九六）所収
山口佳紀（一九八二）「活用形式の変異から見た動詞語彙の一考察」『国語語彙史の研究 三』和泉書院、『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂出版、一九八五）所収
『角川古語大辞典』中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編、角川書店、一九八二－一九九九
『岩波古語辞典 補訂版』大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編、岩波書店、一九九〇
『日本国語大辞典 第二版』日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編、小学館、二〇〇〇－二〇〇二
『時代別国語大辞典 上代編』上代語辞典編修委員会編、三省堂、一九六七
『時代別国語大辞典 室町時代編』室町時代語辞典編修委員会編、三省堂、一九九四
『訓点語彙集成』築島裕編、汲古書院、二〇〇七－二〇〇九
『日本古典対照分類語彙表』宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉編、笠間書院、二〇一四

引用には以下の文献を使用した。なお、引用に際して私に表記を改めた箇所がある。

記紀歌謡…日本古典文学大系3『古代歌謡集』（土橋寛・小西甚一校注、岩波書店、一九五七）、『万葉集』…『万葉集電子総索引』（古典索引刊行会編、塙書房、二〇〇九）、『続日本紀』宣命…『続日本紀宣命 校本・総索引』（北川和秀編、吉川弘文館、一九八二）、『古今和歌集』…新編日本古典文学全集11『古今和歌集』（小沢正夫・松田成穂校注、小学館、一九九四）、『大和物語』『平中物語』…新編日本古典文学全集12『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注、小学館、一九九四）、『古今和歌六帖』…『新編国歌大観 第二巻 私撰集編 歌集』（「新編国歌大観」編集委員会編、角川書店、一九八四）、『枕草子』…新日本古典文学大系25『枕草子』（渡辺実校注、岩波書店、一九九一）、『源氏物語』…新編日本古典文学全集20－25『源氏物語』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注、小学館・一九九四－一九九八）、高山寺本『三教指帰』…高山寺資料叢書第二十三冊『高山寺古訓点資料 第四』（高山寺典籍文書綜合調査団編、東京大学出版会、二〇〇三）、『平家物語』…新編日本古典文学全集45『平家物語 1』（市古貞次校注、小学館、一九九四）、『名語記』…『名語記』（北野克、勉誠社、一九八三）、『徒然草』…新日本古典文学大系39『方丈記 徒然草』（佐竹昭広・久保田淳校注、岩波書店、一九八九）、『史記抄』…

抄物資料集成第一巻『史記抄』（岡見正雄・大塚光信編、清文堂出版、一九七一）・『史記桃源抄の研究 本文篇 四』（亀井孝・水沢利忠、日本学術振興会、一九七一）、『玉塵抄』…新抄物資料集成第二巻『玉塵』（大塚光信編、清文堂出版、二〇〇〇）

〈付記〉

本稿は、京都大学大学院文学研究科に提出した博士論文（二〇一八年度）の一部を改稿したものである。